渥 美 正 平 先 生

星を愛する真摯な英語学者・教育者

松 井 進 平

渥美正平先生と筆者が初めてお会いしたのは1950年か51年である。当時同志社大学の英文学科では，学科としていくつかの読書会を開いていたが，その一つ，英文法の読書会でのことであった。小柄で，控えめな話し方をされるが，言っておられることは理論的で明確であるという印象であった。

渥美先生は1925年（大正14年）静岡県浜松市に生まれ，1944年(昭和19年)に浜松第二（旧制）中学校を卒業された。太平洋戦争の末期である。この中学時代に先生は天文学に興味を持たれ．天文書を読みあさり，天文部（英語使用が禁じられた当時は天文クラブという名称は使えなかった）で天文観測会などに積極的に参加した。これは先生にとって「戦時中の殺風景な中学生活の中の唯一楽しい思い出」となっている。この時期から天文書を読んでは大宇宙に思いを致し，夜星を見ては「魂を天外に飛ばし」てこられたことは，失礼ながら外見からでは判らない，先生の心の奥底にあるロマンチックな若さと，人間としての芯の強さに関係があるように思われる。先生は，英文学者野尻抱影の言う「天文学」（てんぶんがく）のロマンに興味を持ち続けてこられた。そして二度に亘る闘病生活の苦難に勝ち抜いてこられた。

渥美先生は1946年同志社大学予科に入学され，教養学部を経て，1951年文学部英文学科を卒業された。引続き，英語学の研究のため英文学専攻修士課程に進み，1953年に修士号を取得された。

先生は，修士論文 "On the Development of the Grammatical Theories from Henry Sweet to Otto Jespersen" を出発点として，Sweet と Jes-

persen に代表される科学的伝統文法の枠の中での理論上の諸問題を研究され，1956年に「現代英語の格について」（同志社大学『人文学』第25号）と「現代英語の格の分類」（口頭発表，日本英文学会第29回大会）を発表された。その後アメリカ構造言語学の研究に目を移し，1963年に「アメリカ構造主義の品詞分類について」（『上野直蔵博士還暦記念特集』）を発表された。これはそれまでの科学伝統文法理論の研究を背景において，当時日本の英語学研究を席巻していたアメリカの構造言語学における品詞論を論じたものである。先生は決して能弁ではない。むしろ寡作の研究者である。しかし先生の文法論は着実な理論の構築がその特徴である。

他方，調音音声学の研究にも力を入れておられたが，アメリカ構造言語学の台頭を契機として，構造主義的音素論の研究に移って行かれた。この英語の音声・音素の研究は，その後の音声英語の教授法の研究につながり，先生は本学の「オーディオ英語」教育の発展に重要な役割を果たされた。この方面の研究を次のように発表しておられる。

「大学教養課程における英語教育とＬＬの利用」，同志社英文学会年次大会（口頭発表），1965

「大学教養課程の英語教育における Language Laboratory の利用」，同志社大学『人文学』第85号，1966

「Audio-lingual Reading の指導と LL」，同志社大学『人文学』第118号，1970

「英米音の表記法と大学英語教育」，同志社大学『英語英文学研究』第３号，1971

「英語聴解力養成指導法再考」，『主流別冊―グラント先生追悼号』，1975

「英語聴解力テスト―大学英語教育の場合」，『主流』第39号，1978

「外国語としての英語の Hearing 能力形成要因の実証的研究（II）」，文部省科学研究費補助金特定研究（共同研究）、1979

「英語聴解指導法五原則試案」，『主流別冊―貞方敏郎先生追悼号』，1981

これらの論文の特徴は的確な観察・分析とそれに基づく教授法上有用な見解である。

渥美先生は真摯な教育者・研究者として，われわれが，少なくとも筆者自身は，見習わなければならない多くの資質をもつ先輩である。1991年3月を以て退職されることは淋しい限りである。先生のご長寿を心からお祈りする。